

2022年06月25日

FT より 「EU は団結を保ち続けられるのだろうか」

Financial Times

Gideon Rachman JUNE 23 2022
(ポッドキャスト放送からの文字起こし)



Can EU unity on Ukraine hold?

European solidarity with Ukraine has been impressive
but can public support last?

Gideon Rachman (以下 GR) EU の結束は今、ひずんできている？

EU は、ウクライナ戦争への強力で統一された対応を非常に誇りに思っている。しかし、戦争が激化し、経済的圧力が高まる中、欧州の結束は続くのだろうか。

ウクライナ侵攻の直後、ドイツのオラフ・シヨルツ首相は自国の外交政策に歴史的な転換を宣言した。

彼は、ロシアのウクライナ侵攻は世界史における「新時代」を切り開いたと述べ、それは、西側同盟国がプーチンのような「戦争屋」を抑止する能力について深刻な疑問を投げかけたと指摘した。

ショルツはドイツの防衛費の大幅な増額を発表し、ウクライナへの全面的な支援を約束した。しかしドイツはウクライナへの武器納入の遅さについて、最近ますます批判を受けるようになった。

今週、Zelenskyy 大統領は、ドイツの Scholz 首相を珍しく公の場で非難し、あるドイツの報道機関に対しこのように述べた。

ショルツ首相には、ウクライナを支援するという確証を与えてもらう必要がある。ドイツは、ウクライナとロシア間でバランスを取るようなことをするのはではなく、どちらを優先するかを選択しなければならない。

ドイツの支持を示すために、オラフ・ショルツは先週、フランスのエマニュエル・マクロン大統領とイタリアのマリオ・ドラギ首相と一緒にウクライナへ向かった。彼らが到着すると空襲警報が鳴り響き、彼らが紛争地帯にいるということを思い知らされた。

彼らはゼレンスキー大統領と面会し、連帯のメッセージを提出した。

しかし、ショルツ政権は、戦争によるドイツへの経済的圧迫も心配しなければならない。ロシアはガスの輸出を制限することでネジを締めている。副首相ハーベックは、国民にエネルギー節約を呼びかけた。

そこで、ウルリケ・フランケに話を聞く。EU の結束は今、ひずんできているのではないか？

Ulrike Franke (以下 UF) **戦争疲れや連帯疲れの危険性がある**

まず強調しておきたいのは、最初の数週間は団結と決断力があったことです。

侵略と開戦、そして残虐行為に対して、幅広い憤りがありました。この戦争の結果、非常に印象的な変化がありましたね。例えばドイツは防衛費に 1000 億ユーロを拠出するようになりました。

2015年には難民を歓迎していなかった国々も含め、EU全体でウクライナ難民を受け入れています。その後、EUの制裁措置がありました。そして今は、多くの関係者がウクライナのEU加盟を推奨しています。

このように、ヨーロッパは世界の変化に対応し、結束しているというイメージがあります。しかし、あなたが言及されたように、これがいつまで続くのかという疑問があります。

もちろんこのようなEUの決定は、各国の意見の相違を抑えています。ヨーロッパの10カ国で世論調査をしたのですが、そのデータは興味深いものでした。

例えば、「戦争の主な原因は誰ですか？」という質問です。もちろん、大多数のヨーロッパ人は、ロシアに責任があると答えます。しかし、イタリアやルーマニアではほぼ3分の1（イタリアは27%、ルーマニアは21%）が、「戦争の責任はEUやアメリカ、ウクライナにある」と答えているのです。

同様に、平和への最大の障害も、イタリアやフランスなどの国々では、「平和への最大の障害は実は西側だ」と答える人がかなりいるのです。だから、もともとそんなに統一されていないんです。ある意味で、今後最も重要なのは、戦争疲れや連帯疲れの危険性だと思います。

世論調査では、「政府はあなた方にとって重要な他の問題に比べて、ウクライナに過剰な注意を払っていないか」と尋ねています。

「ウクライナにすでに十分な注意を払っている」、「ウクライナに過剰な注意を払っていない」と答えた人は、すでに半数近くに達しているのです。

GR ロシアは圧力を強めつつあるか？

おそらく、プーチンはそのことをよく知っていて、おそらく今、圧力を強めようとしているのだろう。先週、ドイツとイタリアへのガスの供給がかなり制限され始めた。おそらく、完全に停止される可能性もある。

そうなれば、たしかにロシアは大きな収入を失うことになる。しかし、数カ月後に迫った冬に向けて、ドイツ政府に対する経済的圧力は非常に高くなるだろう。

そこでだが、ロシアは今、明確に圧力を強めていると思うか？

UK 状況はロシアの手のひらの上で展開されている

私たちは、まさにそのような状況を目の当たりにしています。ドイツでは、1日おきに誰かが「1キロワットの節約が大事だ」（油の一滴、血の一滴）というスローガンを叫び、国民ぐるみの議論になっています。シャワーの時間を短くしたり、暖房を控えたりすることが求められています。

幸いなことに、今は夏ですから、そのような問題はあまりありません。

たしかにエネルギーは節約しなければならない、特にガソリンタンクは満タンにしておかなければならない、ということは真剣に考えられています。それが基本的に、現在行われていることです。

ドイツはロシアのガスに大きく依存しているため、冬に向けて備蓄を満タンにしています。そのため、石炭火力発電所の稼働時間を長くしたり、発電量を増やしたりして、ガス供給制限に対抗しようとしています。

非常に厄介なことですが、ロシアへのさまざまな対抗策がとられています。しかし、それでも、これは現実の問題です。プーチンは当然のことながら、ここに圧力をかけてくると思います。これまでのところ、この状況は彼の手のひらの上で展開されていますね。

ヨーロッパ諸国がロシアからの石油輸入を減らすか、全く輸入しないことを決めたとしても、それは主に石油価格の上昇に寄与しています。結局、ロシア企業は以前と同じくらい、いやそれ以上に儲かっていることになるのです。

だから、これは本当に、厄介なことなのです。

長い目で見れば、ヨーロッパ諸国が代替品を探し、ロシアへの依存度を下げることが良いことだと思います。しかし、短期的には、ヨーロッパ諸国に対して圧力をかけることができるのはむしろロシアなのです。このような状況にはがっかりしてしまいます。

GR 今年の冬は大丈夫だろうか？

ヨーロッパの人たちの冬支度はどうなっているのだろうか？

つまり、少しは警戒しているだろうが、これから新たなガスの供給先を見つけることは、とても困難になるのではないだろうか？

UF 「新しい世界」を迎えていることを覚悟しなければならない

そこなのです、ええ。

幸いなことに、冬までまだ数ヶ月ある。まだ深刻と言うほどではないし、凄く心配はしていない。簡単なことではないのですが、いろいろ手はあるだろうと思っているのです。

まだ数カ月はある。幸いなことに、ドイツなどの国々は、この問題に使えるお金を実際に持っています。例えば、アメリカなどから液化ガスを購入することができるのです。

また、各国政府はカタールや他の国との取引に積極的で、以前は取引したくなかったような国とも取引するようになっています。

ですから、冬までには解決策が見つかり、ガソリンタンクも十分に供給されるだろうと願いながら、多くの努力がなされると思います。

しかし、もしこの冬が本当に厳しいものであったら、あるいはその前にガスの供給が止まっているようなら、かなりまずいことになるかも知れません。

これは、私たちが生きているこの「新しい世界」の一部なのです。そこはすべてが常に利用可能で、安全で、簡単に手に入るという世界ではありません。

それは普通の人々が地政学の意味を悟り、地政学的対立の圧力を肌で感じるという新しい世界です。

ここ数十年では考えられなかった新しい局面を、私たちは迎えているのだと思います。

GR ショルツ首相の言行不一致の背景は？

ここでドイツがこの危機にどう対処しているかに着目してみよう。

ショルツ首相はレトリックのレベルではかなりのストロングマンだ。彼はドイツの政策に大きな変化をもたらすと発表した。

しかし、ウクライナ人はドイツに不満を抱いている。ショルツが約束通り早く武器を届けなかったからだ。

その裏で何が起きているのだろうか？

UF ドイツにもいろいろ事情がある

そうですね。これは本当に重要な質問です。実情は Twitter など語られているよりも複雑で、少しニュアンスが違っています。

私が「ドイツは榴弾砲や対空戦車などを提供することを約束した」という記事を投稿するたびに、Twitter はこう反応します。「この10年で？」「2025年に実現する？」「すぐに実現する？」

つまり「ドイツは足を引っ張っている、十分なことをしていない」というのが人々の思いです。

しかし、軍事支援の約束を見ると、ドイツはウクライナに対する第4位の援助国であることがわかります。つまり、アメリカ、EU機関、イギリスの次に多いのです。

第4位というのは、その規模を考えれば納得がいくし、悪い印象はない。問題は、約束した数字と実現した数字の間に大きな差があることです。

キール研究所はこの点に関して非常に説得力のあるデータを発表しています。

残念ながら6月7日までのデータなので、それ以降は少し変わっているかもしれませんが、ドイツが約束したもののうち、実際に提供されたのはわずか35パーセントです。

これはひどい数字です。他の多くの国では、ほぼ100%です。ラトビア、エストニア、カナダといった小国に次いで、ドイツは8位です。

ドイツがこれまでに提供したのは、軽火器、対空ミサイル、機関銃、弾薬、ヘルメットなどです。しかしドイツが約束したのは、地对空ミサイル、ゲパード戦車50両、対空戦車、榴弾砲7両といった大型のものです。（この部分一部聴取困難）

そして、これらのものはまだウクライナに届いていません。

ドイツが官僚主義的で、時間がかかりすぎていることが原因かもしれませんし、ドイツを批判するのはもっともです。

GR ロシアへの罪の意識

ドイツの重火器がロシアの飛行機やミサイルを撃墜し、ロシア兵を殺しているのではないか。

この考えに関して、ドイツには長引く不快感のようなものがあると思うか？

UF ドイツは反軍事的な国

確かに、そこには多くの問題があります。

まず、2つの大戦を経て、ドイツ人は一般的に軍事的なことが好きではありません。一般論に聞こえるかもしれませんが、これは正しいと思います。ドイツが平和主義的な国だとは言いません。しかし、ある意味、反軍事的なのです。国民も政府も、軍事的な紛争に関与することを好まないのです。

ですから、そもそもこのような決定に対して、心のなかでは深い不快感を抱いていると思います。だからこそ、これはドイツと特にこの政府にとって非常に大きな問題なのです。

そして、ドイツには差し出すほど多くの資源がない、という要素もあります。

2月24日以降、ドイツ連邦軍を長く見てきた人たちにとっては、当然のことかもしれませんが、ドイツ連邦軍は実は小規模な武器庫しか持っていない。

実際、多くの場合、ドイツ連邦軍は自軍の兵士を武装するのに十分な装備を持っていないのです。

だから、何かを提供するというのは本当に難しいことなんです。ドイツがこれまで手放してきたものの中には、連邦軍がもう使っていない古い装備もありました。それは基本的にメーカーに返されました。

しかし今は、ドイツ連邦軍がこの武器を手放したら、自分たちはその武器を持っていない、という事態になっているのです。これはまた厄介なことで、軍事担当者にとってはかなり居心地の悪い状況です。

このように、政治的、現実的に難しい理由はたくさんあります。このことが、ドイツが主導権を握っていない理由かもしれません。

ドイツはヨーロッパのリーダーであり、指導的な役割を担っているという議論が常になされていますね。しかし、こと軍事面ではそうではありません。ドイツは基本的に追従者です。

他の国々は基本的にドイツに何かをするよう求めているのです。そして2週間後、オラフ・ショルツが発表し、「はい、わかりました、やります」と言ったのです。

見栄えは悪いですが、これが真の経過の説明です。

GR 三国首脳のキエフ訪問の意義は？

言われる通り、ショルツは、首相になるには非常に難しいタイミングだったからね、その10日後に戦争が勃発するわけだから。

しかし、彼はついにキエフを訪問した。フランスのエマニュエル・マクロン大統領、イタリアのマリオ・ドラギと一緒にいた。

その訪問はどんな意義があったのだろうか。

UF とりあえずは行ったことに意義がある

この訪問は非常に重要で、彼らは本当にシグナルを送ろうとしたと思います。特にショルツは、何かを手を持って来る必要がありました。ただ写真を撮りに来るだけではだめだったのです。

実際、ショルツも「写真撮影のためだけには来られない」と話していました。

「なぜなら、これほど長い間、訪問しなかったし、ウクライナ人もゼレンスキーも批判していることは知っていたから」

だから、何か持っていく必要があったんです。それは、より多くの重火器を持って来る、あるいは持って来る約束、そしてEU加盟の地位という約束です。しかし彼らは武器を抱えてやってくることはできなかった、すでにできることはやっているからです。

だから、EU加盟のために行ったのだ、と言いたいところですが、それ自体について議論する必要があります。

しかし、彼らが来て、写真撮影をし、共同記者会見を行い、ウクライナの EU 加盟を支持したことは、実はとても重要なことだと思うのです。それは他の EU の首脳も支持しています。

GR **メランションは親ロシアか？**

もちろん、すべてのリーダーはそれぞれの国内政治的背景を踏まえて活動してる。マクロン大統領はフランス立法府の選挙でさらに複雑な状況に陥った。

メランション党は基本的に親ロシア派と言えるだろうか。少なくとも、この戦争について EU の路線に従わないことは確かなようだが。

UF **メランションの驚くべき提唱－非同盟**

「親ロシア」といっても、その中身は多彩で、一筋縄では行きません。もちろん、フランスの新しい左翼同盟はいくつかの異なる政党で構成されており、それぞれ国際的な見解が異なります。

中には、あからさまな親ロシアとまではいかななくても、国際関係において驚くべき見解を持っている政党もあります。例えば、**メランション党は、フランスに対して基本的に非同盟の地位を提唱**しています。

フィンランドやスウェーデンまでもが NATO に加盟しようとしている今、彼はフランスに NATO から脱退してほしいと思っているのです。これはかなり驚きです。また、選挙運動中に親ロシア、さらに親プーチンの立場からの発言もありました。

それよりも、今回の下院選挙で衝撃的だったのは、マクロン大統領が国民からさほどの支持を得ていないということです。

EU、ヨーロッパの問題に関しては、マクロンは非常に強力な親ヨーロッパ主義です。国内では確かにマクロンにとって良い状況とは言えません。フラン

ス人はヨーロッパ、EU、そしてその中でのフランスの役割について、常にどっちつかずの存在でした。

しかし国際的にみて最も重要なことは、マクロンが再選されたこと、マリーヌ・ルペンや他の誰かでなかったということでしょう。

GR ウクライナ戦争とマクロン

しかし、ウクライナ戦争に関して、マクロンは象徴的立場にある。なぜなら、彼は強固な EU 統一派の大統領だからだ。

彼のビジョンは、EU を構築し、最終的にはヨーロッパの戦略的自治を目指すという考えである。

しかし、ウクライナの問題では、EU の多くの人々が彼の行動に強い疑いの目を向けている。そのため、彼は EU 統一の旗頭の役割を失う危険にさらされている。

ポーランドはバルト三国、北欧諸国は皆、フランスをかなり批判しているね。彼はそれを引き戻すことができると思うか？

UF 袋叩きにされる理由はないが...

いまやマクロンが外交的、国際的に行おうとしていることのほとんどすべてが、人々の批判的的となっているように感じられます。そのうちのいくつかは理解できます。彼はまず思想家であり、政治家としては十分でないという問題があります。

たとえば「ロシアに恥をかかせるべきでない」などと口に出してしまします。政治的なコミュニケーションという点ではまずいことで、東ヨーロッパの人々には「これはひどい」と映ってしまうでしょう。

私が言いたいのは、多くの人さまざまな 이슈 でマクロンを批判しては喜んでるのです。

彼は、というよりフランスは、EUの輪番制の議長国です。彼はその立場をわきまえ、他の人達と協力しヨーロッパを救おうとしているのです。とはいえ、フランスを仲介役にしたいような発言もしていて、正直どうなんだろうという感じです。

「フランスは中立ではないのだ」ということはわきまえるべきでしょう。少なくとも東欧諸国はそういう目で見えています。フランスは、仲介問題でEUをリードできる国ではないのです。

(了)